

## 『菅家文章』『菅家後集』から見た仏教語・唐代口語の受容

— 豊語を例として —

中山 大輔

## 一、はじめに

本論は、菅原道真が『菅家文章』『菅家後集』で使用した漢語の中から、豊語の全用例（異なり語数一七語、延べ語数二六三例）を取り上げ、中国宋代までの漢詩漢文における用例と比較し、また上代・中古前期の本邦主要漢文学作品の豊語受容の推移にも触れつつ、その日本語史における漢語受容の一事例として考察を加えようとするものである。漢語豊語の特質については、中山（二〇二二）に述べたとおり、基本的に中国における中国音に基づく擬音語・擬態語であるゆえ、本邦で独自に造語が試みられることは稀な語彙であり、そうした点から、本邦で用いられた漢語豊語は、中国文献における用例からの影響を浮き彫りにする指標になると考えられる。

筆者は菅原道真の唐詩詩語受容の正確さについて、既に安部・中山（二〇二二）にて詩語「鼓枕」を取り上げて考察し、また唐から宋代までの中国における「鼓枕」の用法変遷について中山（二〇一四甲、乙、二〇一五）

にて調査を行った。本論はそうした、語彙から漢語受容の変遷を検討しようとする試みを疊語に敷衍したものである。

本論のテーマは長文になるため、全体を三つの観点から整理・分割して考察を進めていきたい。一つ目は上代・中古前期の本邦疊語使用の概観と『菅家文章』『菅家後集』の疊語を抽出した事で見える特徴(中山(二〇二二)、二二)目には道真の疊語から見える仏教語および唐代口語の受容の考察(本稿)、三つ目には道真作品内での疊語の実例の考察および全体を通しての考察(予定稿)について論じている。

なお、全体の結論として以下の三点を示す。

○上代・中古前期の本邦漢詩文において、『懷風藻』から『経国集』にかけて時代が降るほど疊語の使用例が増加する傾向がある。

○『菅家文章』『菅家後集』の疊語一一七語の内、半数以上の六〇語が本邦での初出例(『日本国語大辞典(第二版)』による)になっている。

○『菅家文章』『菅家後集』の疊語には、唐代以前の散文を含めた中国文献に用例の無い、独自の語彙は確認できなかった。

本稿では、更に次の点を特に加えることができる。

○『菅家文章』『菅家後集』の詩には、仏教語や唐代の口語に由来すると考えられる語彙が用いられている。

## 二、調査の方針 — 疊語の特質から

中山(二〇二二)において、『菅家文章』『菅家後集』(以下『文章』『後集』と略記する)の作品中の全疊語を抽出した。その内、特に仏教語および中国唐代の口語との関連が考えられる語を認めたので、本稿ではその六語〔在在〕〔代代〕〔分分〕〔略略〕〔顆顆〕〔荒荒〕〕についての考察を報告する。六語とも『全唐詩検索系統』では四例以下しか確認できなかった疊語であり、この用例数の僅少さは、『全唐詩検索系統』には全四七、四四〇首という膨大な数の詩が収められている点から考えれば、ほぼ唐代では詩的な語、いわゆる詩語として認識されいかなかった語彙である事を示していると考えられる。

以下、各疊語の『文章』『後集』例を中国における用例と比較し、その典拠について考察をしていきたい。用例の調査方法や、引用文の本稿における記載等の凡例については以下の通りである。

### 《凡例》

- 本稿において用例の調査や例文の底本として用いた資料類については、適宜以下括弧内の通りに略記した。
- 川口久雄校注『日本古典文学大系72 菅家文章 菅家後集』(『川口大系』)、『大漢和辞典(修訂第二版)』(『大漢』)、『漢語大辞典』(『漢詞』)、『日本国語大辞典(第二版)』(『日国』)、『佩文韻府』(『佩』)、『全唐詩検索系統』(『全唐詩』)、『唐宋詞全文資料庫』(『唐宋詞』)、『漢籍電子文献資料庫』(『漢籍庫』)、『SAT大蔵経データベース2018』(『大蔵経』)

○ 各疊語の『文章』『後集』と『全唐詩』での用例数(『全唐詩』の用例数については、文字検索による数であ

り、疊語ではない単なる同字連続も含む)を掲出し、参考までに『文章』『後集』の例にて各疊語を訓読した際の日本語としての品詞についても、『文章』『後集』での各疊語用例数の下に記した。

- 各疊語の『文章』『後集』例に該当すると考えられた『大漢』『漢詞』『日国』における語釈を抜粋して引用した。
- 『文章』『後集』の用例は頭に○を、その他の参考用例は頭に○を付して掲出した。『文章』『後集』の用例は『川口大系』の詩文番号と詩題を、参考用例は文献名や作者、詩題・章名等を記した。詞作品については、作品固有の詞題の他、丸括弧書きで詞句の型を示す詞碑名も記した。『川口大系』の詩文番号については、漢数字にて表記し(六〇など)、特に『文章』巻七以降の文章篇作品の番号には傍線を付し(六六一など)、『後集』作品の番号は太字ゴシック体(四八四など)で記した。本文中でも『文章』『後集』作品を指す際、適宜この詩文番号を用いた。

- 各疊語の典拠となる用例の調査には、『大漢』『漢詞』『佩』『日国』『全唐詩』『唐宋詞』『宋詩』『漢籍庫』、『大藏經』を参照した。

- 用例文の前後略等抜粋形態については詩題等の下に記載した。また、その用例文を各疊語の例文として引用している辞書類も示した。今回引用例文の確認をした辞書類は『川口大系』『大漢』『漢詞』『佩』『日国』の五資料である。

- 用例文の底本については、『文章』『後集』は『川口大系』を、『全唐詩』については検索結果本文を使用し、その他は□内に都度底本資料名を示した。史書の底本とした『宋紹興本』等については、『漢籍庫』又は『中国哲学書電子化計画』により参照したものである。各底本の詳しい書誌情報は、稿末の参考資料欄を参照されたい。訓読文については例文末に出典をその都度記し、特記の無いものについては筆者が試みに書き下したも

のである。振り仮名についても、全て出典の通りに引用した。

○ 『文章』『後集』例については、当該疊語についての『川口大系』の頭注・補注がある場合、用例文の後に掲出した。疊語単独ではなく一句全体に対する注釈については(句)と注記し、当該疊語の解釈に当たる箇所には傍線を付した。

○ 用例文における傍線や傍点は、特記の無い限り筆者が付したものである。また、各節の主題となる疊語は太字ゴシック体にした上で直傍線を付し、その他の注目したい箇所には波傍線や傍点を付した。

### 三、仏教語由来の『菅家文章』『菅家後集』疊語

本章では、『菅家文章』『菅家後集』の疊語の中で、仏教語が由来と考えられた四語「存在」「代代」「分分」「略略」について、その用例の詳解と典拠について述べる。

#### 三―一、【存在】

用例数 『文章』4例(形容動詞)、『全唐詩』3例

辞書語釈 『大漢』「ところどころ。」「漢詞」「処処。」「日国」「あちらこちらの村里。」

「存在」は『文章』中、詩と文章それぞれに二例ずつ、計四例確認できた。以下『文章』例を『川口大系』の「菅

原道真年表」に従って制作年代順に挙げる。また各作品の制作年も題下に記した。

◎『文章』六六一「為清和女御源氏修功德願文。」(部分) 仁和三(八八七)年

松檟雖老、泣血之涙如昨。 松檟老ゆと雖も、泣血の涙昨のごとし。

仰願上方下方、若南若北、 仰ぎ願はくは上方下方、若南若北、

在<sub>る</sub>処<sub>る</sub>、将益莊嚴。 在在処処、将に莊嚴を益さむことを。

※訓読は『川口大系』の訓点に従い筆者が試みた。

◎『文章』五二六「書齋記。」(部分) 寛平五(八九三)年

又学問之道、抄出為宗。 又、学問の道は、抄出宗為<sub>た</sub>り、

抄出之用、稟草為本。 抄出の用は、稟草本為<sub>り</sub>。

余非正平之才、未免停滯之筆。 余 正平の才に非ずして、未だ停滯の筆を免れず。

故此間在<sub>る</sub>短札者、 故此間に在在の短札は、

惣<sub>す</sub>是抄出之稟草也。 惣べて是れ抄出の稟草なり。

※訓読は『菅家文章注釈 文章篇第一冊』による。

◎『文章』四三三「詩友会飲、同賦鶯声誘引来花下。」(後略) 寛平八(八九六)年

鳥声人意両嬌奢 鳥<sub>とり</sub>の<sub>こゑ</sub>と人<sub>ひと</sub>の<sub>こころ</sub>の<sub>い</sub>と 両<sub>ふた</sub>つながら嬌<sub>おこ</sub>り奢<sub>ほ</sub>れり

処々相尋在る花 処処に相尋ぬ 在在の花

身已遷喬来背翼 身は已に喬きに遷り 来りて翼を背く

道如求友趁廻車 道は友を求むるが如く 趁ひて車を廻す

※訓読は『川口大系』による。

〔頭注〕(句)「在在所所の花を尋ねてあるく。」

◎『文章』四四八「重陽侍宴、同賦菊有五美、各分一字、心製」(前略) 昌泰元(八九八)年『日国』所引

謙徳晚開秋月抄 謙徳 晩に開く 秋月の抄

勁心寒立曉霜前 勁心 寒えて立つ 曉霜の前

中流採得嘗看後 中流採ること得て嘗め看し後

在る群官紫府仙 在在の群官 紫府の仙

※訓読は『川口大系』による。

〔頭注〕(句)「菊水の流れに沿う在在所の人々のように、今日この宴に列なる諸官の方方は、みな菊花酒を飲んで身も軽くなつて紫府の仙人となるであろう。」

以上の四作品の成立順から、『文章』の「在る」はまず散文(六六一、五二六)に用いられ、その後、詩(四三三、四四八)に応用された畳語であると考えられる。なお、『日国』の「在在」の項では、制作年としては最も新しい四四八の用例が本邦初出例として引かれているが、初出という点では六六一の例を掲出するべきと考

えられる。

意味用法としては散文と詩の例で違いは無く、ほぼ『大漢』の語釈「ところどころ」の意味通りであると考えられる。初例の六六一のみ「在る処」と四字熟語の形だが、他は「短札」「花」「群官」といづれも直接名詞に係る形容動詞的用法である。

また、「処処」との関連では、六六一「在る処」の他、四三三でも「処々相尋在る花」と同句中に「処」が用いられており、「存在」と「処処」は『文章』においては関連の深い疊語だったと考えられる。ちなみに、『文章』『後集』中に「処処」はこの六六一と四三三での二例しか確認できず、『文章』『後集』において「処処」は必ず「在る」と共に用いられている事になる。ただ、『全唐詩』においては「存在」と「処処」が同句中、また同作品中としても共に用いられている例は今回確認できなかったため、『文章』に見られるこの二語の関連は唐詩に由来するものではないと考えられる。

次に、中国の「存在」例を見ていきたい。まず四三三の「処々相尋在る花」句の典故として、金子（一九七八）にて『白氏文集』中の一例が指摘されていたので、確認してみたい。

○『白氏文集』卷六〇「劉白唱和集解」（部分）『新釈漢文大系 白氏文集十』

如夢得（中略）之句之類、夢得の（中略）の句の如きの類は、

真謂神妙。在在処処、真に神妙と謂ふべし。在在処処、

応当有靈物護之。

まさに靈物の之を護ること有るべし。



豈唯両家子姪秘藏而已。 豈に唯だ両家の子姪の秘藏するのみならんや。

※訓読は底本による。振り仮名は一部のみ。

これは『劉白唱和集』の「解」（序文）の例であり、『全唐詩』には収載されていない用例である。「在在処」と四字熟語での用例のため、『文章』としては金子氏の指摘されている四三三の「処々相尋在々花」よりも、六六一の「在々処々、将益莊嚴」の典拠と捉えた方がよりの確ではないかと考えられる。この白居易の「在在」例は今回調査した辞書類では引用されていなかったものの、『文章』の「在々」及び「処々」の典拠として注目すべき用例だと考えられる。なお、底本として参照した『新釈漢文大系 白氏文集十』には、この「在在処処」の出典について特に記載はなかった。

次に、『全唐詩』での「在在」例を確認していくが、今回『全唐詩』で検索された三例の「在在」例の内、以下に挙げる武元衡の一例以外は疊語にならない、単なる「在」字の連続であった。つまり、『全唐詩』における疊語としての「在在」の用例数は、検索結果を三例として節頭でも掲出したが、実際は一例のみとなる。以下、唯一疊語例として確認できた武元衡の用例を載せる。

○『全唐詩』卷三二七 武元衡「春齋夜雨憶郭通微」（全文）『漢詞』所引

桃源在在阻風塵 桃源在在 風塵を阻み

世事悠悠又遇春 世事悠悠として又春に遇ふ

雨滴階清夜久　雨滴階に間み　清夜久し  
焚香偏憶白雲人　香を焚きて偏に憶ふ　白雲の人

この武元衡の例は『漢詞』の「在在」初例、また『菅家文章注釈 文章篇第一冊』でも『文章』五二六「書齋記」中の「在在」の典故として引かれており、「在在」の中国における初例として確実な用例と考えられる。ただ、文法的には「桃源在在」で句が切れており、名詞的用法と考えられる。よって形容動詞的な『文章』の用例とは異なっており、また「処処」も伴わないため、『文章』例との共通点は少ないと言える。尚、先述の通りこの武元衡以外の『全唐詩』における「在在」は、例えば「使君何在江東（使君何くにか在る、江東に在り）」（白居易「宿齋使君莊水亭」）の様に、文脈・詩句的に疊語とはならない用例である事が確認できた。

以上、今回の調査では、先掲の白居易「劉白唱和集解」と、武元衡「春齋夜雨憶郭通微」の二例の他は、道真以前の中国における疊語の「在在」例は確認できなかった。

ただ、中国でも後世の例を見ると、『宋詩』には用例が無かったものの、『唐宋詞』には疊語としての「在在」例が六例（南宋五例、不詳一例）確認できた。以下南宋期の一例を挙げる。

○趙以夫「慶元聖節（万年歡）」（部分）『唐宋詞』

五莢萸舒　五莢萸は舒び

光映玉階瑤草　光は玉階瑤草に映え

在在(東風語笑)

在在の東風語り笑ふ

慶此日 虹流電繞

此の日を慶び 虹流れ電繞る

これは詞題「慶元聖節」の通り新年を慶ぶ詞であり、「在在」はそこかしこの意味に用いられている。名詞「東風」に直接係っており、『文章』例に近い形容動詞的用法と考えられる。中国でも時代が降ると、『文章』の「在在」と類似する用例が現れてくる様である。

以上、中国文献の「在在」例を確認してきたが、特に『文章』の「在在」の初例である「在在処処」という形の用例は、先掲の白居易の「劉白唱和集解」の一例しか今回の調査では確認できなかった。しかし、『文章』の「在在」の初例が六六の願文にあることを手がかりに、仏典における「在在」例を『大藏經』にて検索したところ、「在在」「在在処処」が三五六例を占める事が確認できた。『大藏經』は道真以降の資料も含まため用例数はあくまでも参考であるが、この点から、「在在」及び「在在処処」は仏典に多く用いられた語彙である可能性が考えられた。以下、仏典における例として、『妙法蓮華經』の「在在」例を二例掲出する。

○鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』卷第三 化城喻品第七(部分) 『大藏經』

彼仏滅度後 是諸聞法者 彼の仏の滅度の後 是れ諸の法を聞く者

在在諸(仏土) 常与師俱生 在在の諸(仏土) 常に師と俱に生ず

※訓読は『大藏経』の訓点を参考に筆者が試みた。

○鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』巻第四 見宝塔品第十一（部分）『大藏経』

其仏以神通願力。 其の仏 神通願力を以て、

十方世界在在処処 十方世界 在在処処

若有説法華経者。 若し法華経を説く者有らば、

彼之宝塔皆踊出其前。 彼の宝塔 皆其の前に踊出し、

※訓読は『大藏経』の訓点を参考に筆者が試みた。

一例目が「諸仏土」に係る形容動詞的用法、二例目が「在在処処」としての用例であり、『文章』の「在在」の用法に類似した例であると言える。その他、「在在」例は『金剛般若波羅蜜経』に二例、『大般涅槃経』に二〇例など、仏教経典本文にも確認できた。

また、『文章』の「在在」は六六一の願文が初例であるが、初めて詩に用いられた四三三の例についても、直前の二首（四三一、四三二）が天台寺院である雲林院への行幸に随行した際の作であり、仏教との関連が窺われる。詩四三二における仏教語の影響については、谷口孝介氏の以下の指摘がある。

仏教語が全体に亘って用いられている。ただそこで見られる特徴は、すでに詩語として定着した仏教語を使

用していることであり、ことに白居易が用いた仏教語に倣った傾向が歴然としている。(谷口(二〇〇六)、傍線筆者)

「在在」例のある『文章』詩四三三そのものは雲林院行幸時の作ではなく、仏教に直接関連はないが、『川口大系』(四三三頭注、四三一補注)によると四三三も雲林院行幸後一ヶ月以内の作であり、四三一、四三二での仏教語の余韻が残っていたとも想像される。谷口氏の指摘する「すでに詩語として定着した仏教語」という特徴は、「在在」は『全唐詩』に武元衡の一例しか見られないため当てはまらないものの、「白居易が用いた仏教語」という特徴は、先掲の通り白居易作品の「劉白唱和集解」に「在在処処」の用例があるため、満たしていると言える。本稿としては、『文章』四三三の「処々相尋在々花」の句は、四三一、四三二の雲林院行幸の余香を含んだ、仏教語的な表現だったのではないかと考えたい。

『文章』の「在在」については、初め六六の願文で「在々処々」として用いられていることから、仏教語として仏典から撰取された語彙である可能性が高いと本稿では考えたい。白居易「劉白唱和集解」の「在在処処」例も典拠として有力ではあるが、用例の多さとしては仏典が優位と言える。道真は「在在」を仏教語としてまず願文で用い、その後四三三、四四八の詩にも応用したのではないだろうか。また、「在在」は『唐宋詞』に六例も用例が見られることから、中国では宋代に入ってから、韻文における使用が広まり始めると考えられるが、『文章』詩における「在在」の用例は、武元衡詩と並んで、「在在」を詩に応用した点でそれら宋代の用例に先んじている事は特筆すべきと言える。

### 三一三、【代代】

用例数 『文章』 2例（形容動詞）、『全唐詩』 1例

辞書語釈 『大漢』「累代」、『漢詞』項無し、『日国』「何代も続いていること。」

「代代」は現在の本邦でも通用する疊語であるが、『漢詞』に立項がなく、また『全唐詩』にも一例しか確認できず、中国においては一般的な語ではなかったと見られる。以下『文章』の用例を『川口大系』「菅原道真年表」に従って年代順に挙げ、それぞれ制作年も記した。

◎『文章』六五三「為左兵衛少志坂上有識、先考周忌、供養一切經法会願文。」（部分）元慶六（八八二）年

余則將家之遺孤、

非有積善之餘慶。

余則ち將家の遺孤にして、  
積善の餘慶有るに非ず。

代々冠蓋、皆是れ王命無私。

代代の冠蓋、皆是れ王命にして私無し。

生々念中、不知国恩何報。

生々念中、知らず 国恩何をもてか報いむ。

※訓読は『川口大系』に付された訓点に従い筆者が試みた。

◎『文章』一三六「絶句十首、賀諸進士及第。」（全文）元慶八（八八四）年

此是功臣代々孫

此れは是れ功臣

代代の孫

神明又可祐家門（かもん） 神明（しんめい） また家門を祐くべし

況為進士揚名後 況（いは）むや 進士（しんじ） 名を揚げてより後（のち）

今待公卿採摺恩 今（いま）や 公卿（こうけい） 採摺（さいしやく）の恩を待たむや

※訓読は『川口大系』による。

〔頭注〕（句）「おそらく和氣朝臣清磨以来代代の功臣であつたであらう。」

「代々」についても、『文章』では願文（六五三）が初例であり、次に詩（二三六）に用いられる願文から詩への語彙の応用の流れが看取される。兩作品の制作年代も、初出の願文六五三が元慶六年、次の詩二三六が元慶八年と、直近ではないが近い時期ではあり、願文の語彙「代々」を参考に、詩に応用した可能性があると言える。兩例共「冠蓋」「孫」という名詞に係る形容動詞的な用法で、またそれぞれ前後に「将家」「家門」と言う語も見え、「家系における代々」の意味であると考えられる。

「代代」の中国例としては、今回の調査では『全唐詩』の一例と、『隋書』に一例を確認できたので以下掲載する。

○『全唐詩』卷一七 張若虚「春江花月夜」（部分）『大漢』所収

江畔何人初見月 江畔何れの人ぞ初めて月を見る

江月何年初照人 江月何れの年か初めて人を照らす

人生代代無窮已 人生代代窮まる無きのみ

江月<sup>くわんげつ</sup>年年<sup>ねねん</sup>祇<sup>ただ</sup>相似<sup>おぼしめ</sup> 江月<sup>くわんげつ</sup>年年<sup>ねねん</sup>祇<sup>ただ</sup>むに相似<sup>おぼしめ</sup>たり

不知<sup>しらず</sup>江月<sup>くわんげつ</sup>待<sup>まち</sup>何人<sup>なにびと</sup> 知らず江月<sup>くわんげつ</sup>の何れの人を待つか

但<sup>ただ</sup>見<sup>み</sup>長江<sup>ながかへ</sup>送<sup>おく</sup>流水<sup>りゅうすい</sup> 但<sup>ただ</sup>見<sup>み</sup>る長江<sup>ながかへ</sup>の流水<sup>りゅうすい</sup>を送るを

○『隋書』卷六九列伝第三四王劼（部分）「宋刻遞修本」

在晋時、 晋に在りし時、

有<sup>あ</sup>以<sup>もつ</sup>洛陽<sup>らくやう</sup>火<sup>くわん</sup>渡<sup>わた</sup>江<sup>かへ</sup>者<sup>もの</sup>、 洛陽火を以て江を渡る者有り、

代<sup>た</sup>代<sup>た</sup>事<sup>じ</sup>之<sup>の</sup>、相<sup>あ</sup>続<sup>つ</sup>不<sup>た</sup>滅<sup>めつ</sup>、 代代之に事へ、相續きて滅せず、

火<sup>くわん</sup>色<sup>しき</sup>変<sup>か</sup>青<sup>せい</sup>。 火色青に變ず。

張若虚は初唐の詩人で、『隋書』も初唐の成立のため、時代的には二例とも道真が参照できた可能性はある。ただ共に「代代無窮」「代代事之」と動詞を修飾する副詞的用法のため、「代冠蓋」等と名詞に係る『文章』例の形容動詞的用法とは異なっている。意味としては、『隋書』例では「代代事之」（代代之に事へ）とあるので、家伝の意味とも取れて「家系における代々」を表す『文章』の例に近いと言えるが、張若虚の例では暁対にある「年年」に近い、単なる人生の漠然とした時間の流れを表していると考えられ、『文章』例と異なる。道真以前の仏典以外の「代代」の中国例は今回この二例しか確認できなかったが、文法や意味が『文章』例と異なり、直接の典拠とはし難いと考えられる。なお、道真以後の『宋詩』と『唐宋詞』においても、「代代」の用例は今回確認できなかった。



ここで「代々」についても、「在在」同様『文章』では願文に初例があるため、仏典の用例を『大藏經』にて検索したところ、計一五九例の用例が確認できた（文字検索による数であり、置語にはならない単なる字の連続を含む）。道真以降の資料も含むため、用例数はあくまで参考であるが、「代代」も仏典に多く用いられる語だったと考えられる。以下、中古後期の訓点本も伝わる『大慈恩寺三藏法師伝』と、最澄の『長講法華經先分發願文』の用例を掲出する。

○『大慈恩寺三藏法師伝』卷第一（部分）『大藏經』

中間為師營造行服。 中間師と為りて行服を營造す。

法師皆許。太妃甚歡。 法師皆許し、太妃甚だ歡ぶ。

願与師長為眷屬代代相度。 願はくは師と長じて眷屬と為り代代相度らむことを。

於是方食。其節志貞堅如此。 是に於いて方に食ひ、其の節志貞堅なること此くの如し。

※訓読は『大藏經』の訓点を参考に筆者が試みた。

○最澄『長講法華經先分發願文』卷上（部分）『大藏經』

為我日本国 從開闢以來 我が日本国 開闢従り以來

登遐諸尊靈 并崇道天王 登遐したり諸尊靈 並びに崇道天王

代代大臣等 文武諸百官 代代の大臣等 文武の諸百官

往生妙淨土 早成無上果 妙淨土に往生し 早く無上の果を成すと為る

※訓読は『大藏經』の訓点を参考に筆者が試みた。

前者『大慈恩寺三藏法師伝』では「代代相度」と動詞に続く副詞的用法だが、意味としては直前に「眷属」ともあり、『文章』例と同じ「家系の代々」として用いられている様である。この「代代相〇」の形は『大藏經』の検索で計二三例確認でき、一種の形式句だったと見られる。後者の『長講法華經先分發願文』の例は「代代大臣」と名詞に係っており文法的に、また意味としても「累代」と取れるため、『文章』例に近い用法と考えられる。最澄は道真の祖父清公と遣唐使として同行するなど菅原家に縁があり、その作品である『長講法華經先分發願文』は、道真も参照する機会があったのではないだろうか。「代代」はこうした、仏教関連の文章に多く用いられる語であったと考えられる。

以上、「代々」については、仏典以外では張若虚詩と『隋書』の二例しか先行の中国例を確認できず、その用法が『文章』例と異なっている点、『文章』中の「代代」例は仏教に関連する願文に初例がある点、最澄の『長講法華經先分發願文』等仏教関連の文章に類例が見られる点から、仏典由来の語彙である可能性が高いのではないかと考えられる。『文章』では「代代」を詩（一三二〇）にも用いており、その点では張若虚詩に続く独自の用例と言える。ただ、「代代」は時代が降った宋代でも韻文における例が今回確認できなかつたため、中国では後世においても詩語として認識される事はなかつたと推測される。

三一三、【分分】

用例数『文章』2例(形容動詞)、『全唐詩』1例

辞書語釈『大漢』①秩序のあるさま。②恐れ恨むさま。③乱れてゐるさま。紛紛。④意念するさま。、『漢詞』

「怨恨。分，通<sub>レ</sub>忿」。、『日国』①それぞれの身分に応じていること。②別々になされること。』※『文章』例に合致する語釈を判断できなかったため、各辞書の全意味項目を引用した。

「分分」は『文章』の詩に二例用いられていたが、その『川口大系』における解釈「ぼつんぼつんと」(六〇)、「ちぢに・ずたずたに」(三五五)に合致する辞書での語釈を判断できなかった。引用した辞書語釈の中で、『文章』の「分々」の語義「ぼつんぼつんと」「ちぢに・ずたずたに」に近いのは、『大漢』③「乱れてゐるさま。紛紛。」もしくは「日国」②「別々になされること。」であろうか。また、『漢詞』では「怨恨。分，通<sub>レ</sub>忿」の語義しか掲載がないため、『文章』における「ぼつんぼつんと」等の意味は中国では一般的ではなかったとも考えられる。尚、『文章』の「分分」例については、今回確認した辞書には用例として取られていなかった。まず、『文章』例から確認していききたい。

◎『文章』六〇「残灯、風韻。」(全文)

一点残灯五夜通

一点の残灯

五夜通ず

分々落涙寸心中

分分落涙す

寸心のうち

餘光不力扶持拳 よくわらからず 扶け持ちて拳ぐ

競下蘆簾恐見風 きそ うれん おろ 競ひて蘆簾を下して風を見むかと恐る

※訓読は『川口大系』による。

〔頭注〕(句)「ぼつんぼつんと蠟燭の蠟が涙がこぼれるように落ちる、心のなかに。」

◎『文章』三五五「曉月、応製。」(全文)

何処粧楼擲玉環 いづ 何れの処の粧楼か 玉環を擲つ

一明一暗曉雲間 ひとと 一たび明るく一たび暗し 曉の雲の間

秋腸軟自蜘蛛縷 あき おも 秋の腸ひは蜘蛛の縷よりも軟なり

寸々分々断尽還 きだきだぶんぶん 断ち尽して還る

※訓読は『川口大系』による。

〔頭注〕(句)「かげろうは風もないのに寸寸分分に蜘蛛の糸という糸をことごとく断ちきって空にうかべて流

れる。蜘蛛の糸が短くたちきれて大空いちめんにかぶのと、秋の物思いのために心がちちに乱れ、腸がずたずたに断ちきられるようだということをかける。」

二例とも七言絶句における用例であり、『川口大系』頭注では六〇の例が「ぼつんぼつんと」、三五五の例が「ちぢに・ずたずたに」と解釈されている。三五五の「ちぢに・ずたずたに」については、『大漢』語釈の「㊦乱れてゐるさま」に通じると取れなくもないが、六〇の「ぼつんぼつんと」は、涙が落ちる擬音語的な表現とも言え、

今回参照した辞書には近似する語釈の無い意味用法と考えられる。

次に、「分分」の中国例を確認していくが、まず『全唐詩』で検索された唯一の例を見てみたい。

○『全唐詩』卷三〇一 王建「和元郎中從八月十二至十五夜翫月、五首之一」(全文)

半秋初入中旬夜 半秋初めて入る中旬の夜

已向階前守月明 已に階前に向ひて月明を守る

従未田時看却好 未だ田ならざる時従り 看るに却りて好し

一分見傍輪生 一分 分見するに輪生を傍にす

この例は字面としては「分分」であるが、語句として「一分／分見」と切れると考えられ、疊語の用例ではない事が分かる。つまり、実質的には『全唐詩』中に疊語「分分」の例は一例も無いことになる。その他、『唐宋词』、『宋詩』といった宋代の韻文を含め、疊語「分分」の用例は仏典以外の中国文献では今回一例も確認できなかった。

次に、『大藏經』における「分分」例を検索したところ、計八五二例(文字検索による数であり、疊語にはならない単なる同字の連続を含む)もの用例が確認できた。以下その内の二例を載せる。

○鳩摩羅什『大莊嚴論經』卷五(部分)『大藏經』

智者善觀察 智者は善く觀察し

陰界及諸入 陰界及び諸入

緣仮成衆生 緣 仮に衆生を成す

分分各別異 分分たり各おのの別異

和合衆分故 和合衆 分れて故より

能作於諸業 能く諸業を作す

※訓読は『大藏經』の訓点を参考に筆者が試みた。

○玄奘『大般若波羅蜜多經』卷三四九(部分)『大藏經』

非理毀罵輕蔑凌辱 非理 毀罵 輕蔑 凌辱

乃至分分斷割支節。 乃至分分と支節を斷割するに至る

菩提爾時都無瞋忿。 菩提爾の時 都て瞋忿無し

但作是念此諸有情深可憐愍。 但だ是の念を作し此の諸有情深く憐愍すべき

※訓読は『大藏經』の訓点を参考に筆者が試みた。

この二例の「分分」は、共に「別異」(「個別の」の意、『広説仏教語大辞典』による、以下同じ)や「斷割」(「區別する」『広説仏教語大辞典』に係っており、「分」の基本字義「わかち。わける。」(『大漢』に近い)「ばらばらに」

や「別々に」と言った意味に用いられていると考えられる。『大藏經』の「分分」の検索結果においては、「分／分」と語句として区切れると考えられる例も複数見られたものの、疊語「分分」と考えられる用例を少なくとも一〇例以上確認できた。『文章』の「ぼつんぼつんと」「ちぢに・ずたずたに」に近い、「ばらばらに」という意味の疊語「分分」の用例は、辞書でも語釈として記載がなかったものの、仏典には複数の類例を確認することができた。

以上、『文章』の「分分」については、これまで見てきた「在在」や「代代」の様に、願文に初例がある等の仏教との関連は直接はなかったが、今回の典拠用例の調査で仏典にのみ先行する類例が確認できたため、そうした仏典由来の疊語である可能性が考えられる。

### 三―四、【略略】

用例数 『後集』 1例（副詞）、『全唐詩』 4例

辞書語釈 『大漢』 「ほぼ。大体。」、『漢詞』 「① 微微。② 猶稍微。稍稍。③ 形容氣派軒昂。④ 古曲名。」「日国」項無し

『後集』の「略略」例については、『川口大系』では「ほぼ」と注釈されており、辞書語釈としては『大漢』の「ほぼ。大体。」がこれに合致する解釈と思われる。しかし、『漢詞』では「① 微微。」（「微微」は「かすか、僅か」の意、『大漢』による、以下同じ）、「② 猶稍微。稍稍。」（「稍稍」は「少しずつ。だんだん。」）、「③ 形容氣派軒昂。」、「④ 古曲名。」

の四項目が示されているものの、この内『川口大系』や『大漢』の解釈「ほぼ」に該当するものがない点が注意される。「略略」は、中国と本邦で解釈が異なる語という事だろうか。まず『後集』の用例から確認してみたい。

◎『後集』五〇六「晚望東山遠寺。」(後略)

秋日閑因反照看

しうじつつか はんせう よ  
秋日閑に反照に因りて看る

華堂挿著白雲端

くわだう さしはさ ぱくうん はし  
華堂 挿みて白雲の端に著けたり

微々寄送鐘風響

びびび よおく かね ふうきやう  
微微に寄せ送る 鐘の風響

略々分張塔露盤

はぼぶんちやう とう ろばん  
略略分張す 塔の露盤

未得香花親供養

みたくあ みつか くやう  
香花は親ら供養すること得ず

偏將水月苦空觀

ひやく すいげつ も ねむころくうくわん  
偏に水月を將ちて苦に空觀す

※訓読は『川口大系』による。

〔頭注〕(句)「東山にある寺の遠景であるが、その塔頂の承露盤さえ、ほぼはつきりと指点できるくらいに輪

廓も分離して区別して見える。分張は、分離してはり出していること。「塔の露盤」は、塔の承露盤。最

上層の頂にあり、九輪を支える。」

詩題に「望東山遠寺」とある様に、遠くの寺の塔の承露盤を望む情景で「略々」が用いられている。「分張」に係る副詞的用法である。「略々」の前句では音に焦点を当て、かすかに聴こえる「鐘風響」について「微々」と表現しており、「微々」と「略々」で聴覚と視覚を対にして寺の情景を描いている。詩題に「晚」ともあるので、



「略々分張塔露盤」の句からは黄昏時に遠く望む仏塔の影が想像されるが、この「略々」は『大漢』語釈と『川口大系』解釈の「ほぼはつきり」見える様なのか、もしくは『漢詞』語釈の「微微」（かすか）に見える様なのか、判断が難しい。この詩のみではどちらにも解釈が可能なので、まず『文章』『後集』中他の「略」字の用法を手がかりにして、「ほぼ」（『川口大系』解釈『大漢』語釈）なのか「かすか」（『漢詞』語釈）なのか、「略略」の意味を検討してみたい。

『文章』『後集』での「略」字は、まず詩では『文章』と『後集』にそれぞれ一例ずつ、計二例確認できた。以下制作年代の順に見ていく。

◎『文章』五二「五月、長齋畢、書懷簡諸同舍。」（前略）

初廃声々聞般若（はつばいせいせいもんぱんぎゃ） 初め声を廃して般若を聞く

暫停念々貴観音（しやうていねんねんきくわんおん） 暫く念念を停めて観音を貴ぶ

慇懃欲趁花間醉（いんきんよくせんとくはなまいたざい） 慇懃に趁めまく欲りす 花の間の酔ひ

約略応容月下吟（やくりやくおんぎよ） 約略に容すべし 月の下の吟

※訓読は『川口大系』による。

まず、一例目の「略」字例は「長齋」の竟宴の場面で、熟語「約略」として用いられている。「約略応容」は、「たいがいのところはゆるしてもらえるであろう。」（『川口大系』頭注）と解釈されており、「ほぼ」に近い意味の用法と言える。仏教行事「長齋」に関する詠作と言うこともあり、「般若」「念々」と言った仏教語も並んでい

る。「略」例のある『後集』五〇六についても、寺を望む内容であり、「略」字が仏教に関わる作品に用いられている共通点は興味深い。

◎『後集』四八六「哭奥州藤使君。」（後略）

家書告君喪 家書 君が喪せにたることを告ぐ

約略寄行李 約略行李に寄せたり

病源不可医 病源 医す可からず

被人厭魅死 人の厭魅を被りて死しくなりぬ

※訓読は『川口大系』による。

二例目の「略」字例も熟語「約略」としての用例で、謫居にて「藤使君」の訃報に接し、「行李」（都に戻る使者）に瓊末ながら誄文を寄せて送る、と言う意味で用いられている。この『後集』四八六は五言四十韻、四百字に及ぶ大作で、全く「約略」ではないのだが、現代の挨拶でも「略儀ながら」と謙る形式句に似た表現と解せようか。この「約略」についても、『川口大系』では「すこしばかり」と訓じられているが、「おおよそ、大体を」に類する意味と考えられる。

以上、『文章』『後集』の詩には二例の「略」字の用例を確認できたが、二例とも熟語「約略」として共に副詞的用法かつ句頭に用いられていた。これは『後集』五〇六の「略」と文法的に同じ用法であり、「略」と「約略」は類似の熟語であると考えられる。そこで意味としても、「約略」は「あらし。大概。大凡。」（『大漢』）であ

るため、「略々」もこの類義とすれば、「かすかに」よりも「ほぼ」の解釈の方が自然だと考えられる。

次に、詩以外での『文章』中の「略」字の例としては、六五〇「吉祥院法華会願文。」中に二例を確認できた。以下掲載する。

◎『文章』六五〇「吉祥院法華会願文。」(部分)

便於弥勒寺講堂、

便ち弥勒寺の講堂において、

略説大乘之妙趣、

略ぼ大乘の妙趣を説き、

引長逝之尊靈。

長逝の尊靈を引く。

(中略)

風月之下、定省之間、

風月の下、定省の間、

以斯一念、略達先考。

この一念を以て、略ぼ先考に達す。

先考曰、善哉、汝作是言、

先考曰く、「善きかな、汝のこの言を作すや。」

余建一禅院、当講二部経。

余一禅院を建て、二部経を講ずべし。

※訓読は谷口(二〇一五)による。

願文における「略」字の用例であり、先掲の『文章』五二の「約略」や『後集』五〇六の「略々」と同じく、仏教に関わる作品で「略」が用いられている。この六五〇中一例目の「略」は亡母伴氏の周忌の場面で、「大乘之妙趣」を「略説」するとある。「略説」は熟語として「おおよそを説くこと」(『日国』)の意で、『日国』では

本邦初出例として『江戸繁昌記』（一八三二—三六年成立）の例が挙げられているが、この『文章』の例はそれを遙かに遡る例と考えられる。また「略説」は『大藏経』中に計八、八七八例あり（文字検索による数であり、熟語にはならない例を含んでいる可能性がある）、仏典で多用されていた語と考えられる。ここでの「略」の意味としては、谷口（二〇一五）でも「略ぼ」と訓読されている通り、「微微」（かすか）ではなく「ほぼ」であると考えられる。

二例目の「略」は「略達」として用いられており、法華経供養の決意を父（先考）に伝える（達）場面である。この「略達」でも「略ぼ」と訓じられており、「ほぼ」の意味として用いられていると考えられる。「略達」の表現は『大藏経』を含め、今回の調査では他の用例を確認できなかったため、道真が「略」を副詞として「達」に掛け、応用した語と考えられる。

以上、『文章』『後集』での「略」字の用例を「約略」二例と「略説」「略達」の計四例を見てきたが、いずれも「ほぼ、大体」の意味で用いられている事を確認できた。「略々」は疊語形なので「略」一字とは若干の語感の違いはあるかも知れないが、『文章』『後集』における「略」字の用例から推定すると、「略々」についても『漢詞』語釈の「微微」（かすか）ではなく、『川口大系』や『大漢』の解釈「ほぼ」の意味に用いられていた可能性が高いと考えられる。

次に、中国における「略略」例を見ていきたい。『全唐詩』で確認できた「略略」例計四例の内、道真以前の作と考えられる三例を作者年代順に挙げる。

○『全唐詩』卷三四八 陳羽「古意」（部分）

男兒全盛日忘旧 男兒全盛にして日に旧を忘れ

銀床羽帳空颼颼 銀床羽帳 空しく颼颼たり

庭花紅遍蝴蝶飛 庭花の紅遍くして蝴蝶飛び

看郎佩玉下朝時 郎を看るは佩玉下朝の時

婦来略略不相顧 婦り来るも略略相顧みず

却令侍婢生光輝 却りて侍婢をして光輝を生ぜしむ

郎恨婦人易衰老 郎は婦人の衰老し易きを恨み

妾亦恨深不忍道 妾亦た深く道を忍ばざるを恨む

この陳羽「古意」の例は、今回確認した辞書類には引かれていなかったが、帰宅しても素っ気の無い「郎」と「妾」の關係的一幕で、「婦来略略不相顧」は意味として「帰ってきてもほぼ互いに顧みることはない」と、『後集』五〇六の「略略」に類似する副詞的な用例と考えられる。作者の陳羽は白居易以前の人物で、年代としては道真がこの詩を参照できた可能性はある。

○『全唐詩』卷四一七 元稹「送友封」（後略）『漢詞』・『佩』所引

輕風略略柳欣欣 輕風略略として柳欣欣たり

晴色空濛遠似塵 晴色空濛にして遠く塵に似たり

斗柄未回猶帶閨 斗柄未だ回らず猶ほ閨を帯ぶるがごとし

江痕潜上已生春　江痕上に潜みて已に春を生ず

○『全唐詩』卷四四七 白居易「聽琵琶妓彈略略」(後略)『漢詞』・『佩』所引

腕軟撥頭輕　腕軟らかにして頭を撥ぐるごと軽く

新教略略成　新たに教へ略略成る

四弦千遍語　四弦　千遍の語

一曲万重情　一曲　万重の情

以上の二例は、本邦でも中古以来愛誦されてきた元稹と白居易の作品中の用例であり、これを典拠と考えたい所ではあるが、二例とも意味・文法的に『後集』の「略々」とはほぼ関連のない用例であった。まず一例目元稹の例は『漢詞』にて「①微微」の項に引用されており、「ほぼ」の意味はなく、「輕風」が「微微」(かすか)に吹く様子を表していると考えられる。文法的にも名詞「輕風」に係る形容動詞的用法のため、『後集』例の副詞的用法とは異なる。二例目の白居易例に至っては『漢詞』にて「④古曲名」の項に引用されており、『後集』例とは無関係の固有名詞としての用例である。

また、『全唐詩』の残り一例の「略略」も「冷杉枯柏路盤空、毛髮生寒略略風。」(巻七六五 王周「遊仙都觀」と、元稹例と同じく風に係る形容動詞的用法であり、意味も「ほぼ」ではないと考えられる。以上、『後集』の「略々」と意味・文法的に近い例は、『全唐詩』では陳羽の一例のみ確認できた。

この他、道真以前の中国における「略略」例としては、今回以下の『魏書』の一例のみ確認できた。

○『魏書』卷一九上景穆十二王列伝第七上陽平王新成(部分)『漢詞』・『佩』所引『宋大字本』

欽少好学、早有令譽、 欽少くして学を好み、早くに令譽有り、

時人語曰、皇宗略略、 時の人語りて曰く、皇宗略略たり、

寿安、思若、 寿安、思若、と。

この一節は『漢詞』にて「③形容気派軒昂。」の項で引かれており、また「皇宗」の様子を表す形容動詞的用法のため、意味・文法的に『後集』の例とは関連が薄いと考えられる。

以上、道真以前の中国における「略略」例としては、『全唐詩』の四例と『魏書』の計五例を確認できたが、道真以降の例としては『宋詩』に二例、『唐宋詞』に四例を確認できた。ただ、品詞としては形容動詞的な例が多く、道真例と同じ副詞的用法と考えられる例は、『唐宋詞』所収・宋代の詞の「当初喚作、捩眼前、略略看承。」(沈蔚「無題(漢宮春)」)の一例のみ確認できた。ただこの沈蔚の例も、「看承」という動詞に係るため副詞と判断したが、「ほぼ」の意味であるかは未確認である。以上の様に、中国文献における「略略」は、『後集』例の様に副詞「ほぼ」の意味で用いられる例は稀である事が確認できた。

次に、『大蔵経』にて「略略」例を調査したところ、検索結果としては計三五例抽出されたが、文脈上「略／略」と切れると考えられる例が殆どで、畳語「略略」の例としては、以下の『広弘明集』中の一例のみを確認できた。「略」字の連続する例は三五例に上ることから、「略」字そのものは仏典に多く用いられていると考えられるが、畳語「略

略」としての例は少ない様である。

○道宣『広弘明集』卷第三〇統帰篇第一〇「五月長齋詩」(部分)『大藏経』

單牢妙傾玄 單牢は 妙にして玄に傾くも

絶致由近臧 絶致は 臧に近づくに由る

略略微容簡 略略として 微容 簡にして

八言振道綱 八言 道綱を振るふ

※訓読は望廬会(二〇一三)による

この「五月長齋詩」は東晋の僧、支遁による五言詩で、先に『文章』の「約略」の例として挙げた『文章』五二「五月長齋華、書懷簡諸同舍。」と同じく、仏事である「長齋」が題材になっている。この引用部分は「維摩詰の語る言葉の特徴を述べ」(望廬会(二〇一三))ている内容とされ、「略略微容簡、八言振道綱」は維摩詰の言葉が「微容」(意味は「奥深く」)望廬会(二〇一三)より、以下同じ)且つ「簡」(「簡明」)で、「ちよつとした言葉で仏の理の綱要を盛んにさせることを言う。」と解釈されている。また、「略略」については「簡略、簡明なさまをいうか。この意味での用例は見当たらない。」(望廬会(二〇一三))と注がなされている。しかし、簡略の意については同句末に「簡」と表現があり、「略略」も簡略の意味とするのは「簡」と重複になってしまふ嫌いだらうか。本稿では、この「略略」は副詞的に「ほぼ。大体。」と解して、「略略微容簡にして、八言 道綱を振るふ」と訓じた方が意味が通じやすいと考える。この様に、副詞「ほぼ」の用法と捉えれば、句頭に用いられている点も含めて『後集』の「略々」例の類例としてこの『広弘明集』の例を考える事ができる。ただ、骨語「略略」として



確認できたのは、『大藏經』中でもこの一例のみである事から、仏教語としても一般的に用いられていた語ではなかったと見られる。

以上、『文章』『後集』における「略」字の用例と、中国文献の「略略」例を仏典を含め確認した。その上で、『後集』の「略々」については、寺塔を望む情景で用いられている点、『文章』『後集』中の「約略」「略説」「略達」といった「略」字を用いた熟語が、「略々」も含め五例中四例仏教に関わる内容で用いられていた点、中国例には仏典を含め殆ど類例が見られず、それらを典拠とした可能性も低いと考えられる点から、道真は仏教関連の修飾語として認識していた「略」を、独自に疊語化して「略略」として用いたのではないかと考えたい。つまり、疊語「略略」は道真が中国の先行例に拠らずに用いた疊語と言えるが、中国でも先掲の『全唐詩』の陳羽や『広弘明集』の支遁による類例が少ないながら確認できるため、本邦でしか通じない和習的な語彙とは言えないと考えたい。

### 三一五、まとめ — 『菅家文章』『菅家後集』の仏教語由来の疊語

以上、仏教語由来と考えられる『文章』『後集』疊語として「在在」「代代」「分分」「略略」の四語を見てきた。まず、「在在」と「代代」については、『全唐詩』等にも用例が見られたものの、仏典に用例がより多く見られ、更に両語共『文章』『後集』中では願文に初例があるため、本稿としては仏教語を詩にも応用した語であると推測した。「分分」についても仏典に一〇例以上の用例が確認できたが、仏典以外には今回の調査では用例を一例も確認できなかったため、典拠は仏教語である可能性が高いと言える。「略略」については、仏典においても用例は一例しか

確認できなかったものの、『後集』にて寺院を望む内容の詩に用いられており、また「略」字の使用が『文章』『後集』中で仏教に関わる作品に集中していることから、仏教語としての性質のある「略」を、道真が疊語化して用いた語であると考えられた。

これらの四語は、共通して『全唐詩』に類例がほぼ無く、中国では詩語としては認識されていなかった様である。四語の内「在在」のみ、後世の宋代の詞でも用例が確認できたが、「代代」「分分」「略略」は宋代でも韻文における類例は確認できず、時代が降っても詩語にはなり得なかったと考えられる。道真がこれらの仏教語と見られる疊語を詩に用いたのは、詩に対する中国本土との語感的相違によるものとも考えられるが、中国でも看過されてしまうような仏教語さえも詩に工夫して詠み込んだ、道真詩の語彙の博搜ぶりを示す例と捉えることはできないだろうか。

#### 四、唐代口語由来の『菅家文章』『菅家後集』疊語

本章では、『文章』『後集』の疊語の中で、唐代の口語が由来と考えられた二語「顆顆」「荒荒」について、その用例の詳解と典故について述べる。

#### 四―一、【顆顆】

用例数 『後集』 1例（名詞）、『全唐詩』 1例

辞書語釈 『大漢』「一粒一粒に。」「漢詞」項無し、『日国』「ひと粒ひと粒。」

「顆顆」については『漢詞』に熟語として立項がなく、中国においては例の少ない語であったと考えられる。まず道真例を見ていく。

◎ 『後集』四八九「白微霰。」（後略）『日国』所引

如碎如黏取貌難も 如しは碎くだけ如もしは黏ねりて 貌かたちを取とること難かたし

被風吹結雪相搏かぜ 風かぜに吹ふき結むすば 雪ゆき相あひまりて

磨牙米籥声しやうが 磨しやう牙が 米よね籥ひて 声こゑ脆もろし

龍領珠投顆りゆうがむ 龍りゆう領がむ 珠たまはけう投ちて 顆りゆう顆がむ寒さむし

※訓読は『川口大系』による。

〔頭注〕(句)「霰が一粒一粒寒いひびきをたてるのは竜の領の下にあるという千金の珠を投げるようだ。」

これは題にもあるとおり、霰の降る情景を詠んだ一首である。「声々」「顆々」の畳対を含む第三・四句は『和漢朗詠集』冬・霰にも採られており、評価が高かったようである。「顆顆」は、霰を龍の首元の珠（龍領珠）に見立て、その「一粒一粒」が、との名詞として用いられている。「顆」の字義「つぶ」（『大漢』）に基づく表現であり、現代語で訓むとすれば「つぶつぶ」と言ったところであろうか。

次に中国例を見ていくが、まず『全唐詩』では以下の一例しか確認できなかった。

○『全唐詩』卷八〇二 趙鸞鸞「檀口」(全文)

銜杯微動桜桃顚 杯を銜みて微かに動く 桜桃の顚

咳唾輕飄茉莉香 咳唾すれば軽く飄ふ茉莉の香

曾見白家樊素口 曾て白家に見し樊素の口

瓠犀顆顆綴榴芳 瓠犀の顆顆 榴芳を綴る

作者の趙鸞鸞は「妓」(平岡武夫(二九六〇))とされる人物であるが、この詩の詳しい成立年代については今確認できなかった。ただ転句に登場する「樊素」は「唐の白居易の妾の名。よく笑ふ。」(『大漢』)であり、つまりこの詩は白居易活躍以後の作であると言える。「顆顆」に係る「瓠犀」は「ひさごの中のさね。美人のならびのよい白い歯の喩。」(『大漢』)であり、「顆顆」はその歯一つ一つの表現として用いられている。歯に係る用例となるが、『後集』例で「顆顆」に係るのは霰なので、物の見立てとしては同じ用法であるが、対象が歯と霰ではやや異なると言える。

唐代までの中国文献の「顆顆」例としては、『全唐詩』以外を含め、今回この趙鸞鸞の一例しか確認できなかったが、この他仏典における道真以前の用例として、『大藏經』では以下の二例を確認できた。

○『浄土五会念仏略法事儀讚』（部分）『大藏經』

十三丈六紫金容 十三 丈六紫金の容

真化由来不二縦 真化 不二の縦に由来す

但使随心觀了了 但だ随心せしめて 觀了了たり

法身妙相自顆顆 法身 妙相 自から顆顆たり

○『一切經音義』卷第一三（部分）『大藏經』

計直可当四百錢一顆金也 計直四百錢一顆金に当るべきなり

一切有部律中說 一切部律中に説有り

亦与此同其金 亦 此と同じ その金

顆顆円大如江豆也 顆顆円大にして江豆のごとし

二例目に「其金顆顆円大」とある様に、意味としては「つぶ」等の丸い物を表現していると考えられ、疊語「顆顆」の確かな用例と言える。ただ、両例とも『後集』例の係る霰とは対象が近似していない様に思われるため、典拠としての関連は薄いのではないかと考えられる。

次に、時代が降った用例としては、『唐宋詞』に計一八例、『宋詩』に計四例の「顆顆」例を確認できた。以下、北宋期の李遵勗と柳永の二例を挙げる。題名の丸括弧内は詞牌名である。

○李遵勗「無題（望漢月）」（後略）『唐宋詞』

黃菊一叢臨砌 黃菊の一叢砌に臨み

顆顆露珠裝綴 顆顆たる露珠 装ひ綴る

独教冷落向秋天 独り秋天に向かひ冷落せしめ

恨東君不曾留意 東君の曾て意に留めざるを恨み

○柳永「二首之一（甘草子）」（後略）『佩』所引『唐宋詞』

秋暮 乱灑衰荷 秋暮 乱灑荷を衰ひ

顆顆真珠雨 顆顆たり真珠の雨

雨過月華生 雨過ぎて月華生じ

冷徹鴛鴦浦 冷徹たり鴛鴦の浦

二例共「露珠」「真珠雨」といった露や雨を「顆顆」と表現しており、霰を表した『後集』の「顆顆」と用法が近似していると言える。『後集』例と宋代の例で用法が近く、何らかの先行する典故が存在するものと考えられるが、今回の調査では道真以前の中国例、つまり宋代の「顆顆」の典故にもなる、雨や霰に「顆顆」が掛けて用いられた中国文献における先行例を確認できなかった。

作品の成立年代としては宋代の例よりも『後集』例が先だが、宋の人物が『後集』の詩を典故に「顆顆」を用

いた事は考えにくく、本稿としては、唐代以前に今回明らかに出来なかつた道真詩と宋詩詞に共通する「顆顆」の典故があつたものと考えたい。

#### 四一、【荒荒】

用例数『後集』1例（形容動詞）、『全唐詩』4例

辞書語釈『大漢』「うすぐらいさま。暗淡たるさま。」「漢詞」「蕭条…冷落。」「日国」「荒れ果てているさま。

うすぐらく荒涼としたさま。」

「荒」の基本字義は「あれる。」「大漢」だが、「荒荒」については、『大漢』語釈の様に「うすぐらいさま。」と明暗を表現する語であると見られる。まず道真例から見ていく。

#### ◎『後集』四八四「敘意一百韻。」（部分）

悔忠成甲冑 ちゆう ちゆう 忠の 甲冑と成らむことを悔ゆ かみちゆう

悲罰痛戈鋌 ばつ ばつ 罰の 戈鋌よりも痛きことを悲しぶ くわせん たへがた

璫々黄茅屋 さうさう 璫璫たり 黄茅の屋 くわうぼう や

荒々碧海壖 くわうくわう 荒荒たり 碧海の壖 へきかい みぎは

吾廬能足矣 わがりよ 吾が廬 能く足んむ よ

此地信終焉 此の地 信に焉に終んむ

※訓読は『川口大系』による。

〔頭注〕「うすぐらいさま。暗澹たるさま。あさましくものすぐらいさま。」

〔補注〕「荒荒」は、杜甫の漫成詩に「野日荒荒白、春流浪浪清」、注に「王洙曰、一云茫茫」とある。「荒々」、  
広兼本「茫々」に作る。」

これは謫居における大作として名高い四八四「敘意一百韻。」中の一節で、引用頭の「悔忠成甲冑、悲罰痛戈鋌」が百聯中の九十五聯目に当たる最終盤である。『川口大系』頭注にて「荒々」は「うすぐらい」「暗澹たる」と解されており、これは「大漢」の「荒荒」の語釈「うすぐらいさま。」にも合致している。ただ、本稿としては、この『後集』四八四の「荒々」は、負の情景としては同じであるが、『日国』の語釈「荒れ果てているさま。」の様に、「うすぐらい」という光の暗さではなく、単に「荒れた」意味として捉える方が自然ではないかと考えたい。なお、引用した『川口大系』補注にもあるように、この「荒々」には「茫々」に作る異文もあるが、その検討については紙幅の都合上別稿を期し、本稿では「荒々」として考察を進めていく。

まずは中国の「荒荒」例を確認する。『全唐詩』には四例確認できたので、以下成立年代順に見ていく。

○『全唐詩』卷二二六 杜甫「漫成、二首之一」（後略）『川口大系』・『大漢』・『漢詞』・『佩』・『日国』所引  
野日荒荒白 野日荒荒と白く



春流浪<sub>レ</sub>浪<sub>レ</sub>清　　春流浪<sub>レ</sub>浪<sub>レ</sub>と清し

渚蒲隨地有　　渚蒲　地に隨ふ有り

村徑逐門成　　村徑　門を逐ひて成る

一例目、つまり『全唐詩』における「荒芜」初例はこの杜甫の五言詩で、この詩は『川口大系』補注でも『後集』の「荒々」例の典拠として掲出されており、今回参照した辞書類全てにおいても「荒芜」の初例として引かれていた。用法としては「野日」を修飾しており、また「白」という色も描写され、日の光の様子を表現したものと考えられる。恐らく『大漢』における「荒芜」の「うすぐらい」「暗淡」という解釈は、この杜詩の用例が元になっていると思われる。ただ、『後集』の「荒々」例は、この杜詩の「野日」、つまり光に係る例とは異なり、「碧海墻」という場所に係っているため、杜詩の様に「うすぐらい」という暗さの表現として捉える必要はないと考えられないだろうか。続いて、杜甫以降の『全唐詩』の「荒芜」例を見る。

○『全唐詩』卷八〇三　薛濤「賊平後上高相公」(全文)

驚看天地白<sub>レ</sub>荒荒　　天地を驚き看れば白く荒荒たり

瞥見青山旧夕陽　　青山を瞥見すれば旧びたる夕陽

始信大威能照映　　始め大威を信ずれば能く照映し

由来日月借生光　　日月に由来し生光を借る

○『全唐詩』卷六三四　司空図「詩品二十四則、雄渾」(部分)

具備万物 万物を具備し

横絶太空 太空を横絶す

荒荒油雲 荒荒たる油雲

寥寥長風 寥寥たる長風

○『全唐詩』卷六三四 司空図「詩品二十四則、流動」(部分)

荒荒坤軸 荒荒たる坤軸

悠悠天枢 悠悠たる天枢

載要其端 載ち其の端を要し

載同其符 載ち其の符を同じうす

一例目の薛濤の例は、杜詩の「野日荒荒白」と同じく「白」と共に用いられているが、この薛濤例は「白」が「荒荒」の前に付くのに対し、杜詩では「白」が後に来ており語順は異なる。また三例とも杜詩の「野日」と異なり、「天地」・「油雲」(「盛にわき起つた雲」)『大漢』・「坤軸」(「地軸」)『大漢』という実体のある景色に係っており、「碧海壖」に係る『後集』例に近い用法と考えられる。ただ、薛濤の例については、「白」ともあり杜詩と同じ光の加減を表す用法とも取れる。司空図の二例については、『後集』の「荒荒」と同じく句頭に置かれた用例であり、文法的にも類似していると言えるだろうか。

以上、『全唐詩』の「荒荒」例を見てきたが、杜甫の例は「野日」という光を修飾するため、「碧海壖」を修飾

する『後集』例とは情景が類似しておらず、典故としてはやや関連が薄いと考えられた。また類似する用例としては司空図の例が確認できたが、司空図は道真と生没年がほぼ同じ晩唐の人物であり、道真がその作品を参考に出来たかは確実とは言えないと考えられる。

道真以前の「荒荒」の中国例としては、今回以上の『全唐詩』での四例しか確認できなかったが、宋代においては「荒荒」の用例は『唐宋詞』に八例（五代十国期一例、宋代七例）、『宋詩』に四例確認できた。以下『唐宋詞』の一例と『宋詩』の二例を挙げる。それぞれ作者の活躍した年代も記載した。

○易静（五代十国）「占月第十二其十六（兵要望江南）」（全文）『唐宋詞』

太平夕 月破作三分 太平の夕べ 月破れて三分を作す

四海荒荒興叛逆 四海荒荒として 叛逆を興し

都縁人主寵奢昏 都縁の人主 寵奢昏く

草寇輒称尊 草寇 輒ち称尊す

○晁説之（北宋）「四顧」（後略）『宋詩』

四顧荒荒孰我容 四顧荒荒として 孰くにか我を容れん

百為深省亦何從 百たび深省を為して 亦何にか従はん

江山風雨愁皆滿 江山の風雨 愁ひ皆滿ち

天地波濤恨未窮 天地の波濤 恨み未だ窮まらず

○楊万里（南宋）「霜曉」（全文）「佩」所引『宋詩』

荒荒瘦日作秋暉 荒荒たる瘦日 秋暉を作す

稍稍微暄破曉霏 稍稍たる微暄 曉霏を破る

只有江楓偏得意 只だ江楓の偏に意を得る有りて

夜接霜水染紅衣 夜に霜水を接みて紅衣を染む

一、二例目の易靜、晁説之の例では「荒荒」が「四海」、「四顧」（周囲）という実体のある空間に係っており、「碧海壚」に係る『後集』の用法と通じると言える。三例目の楊万里の例は「瘦日」に係っており、こちらは光に係る杜甫の「荒荒」例に近いと言える。「荒荒」については、杜甫例と同じく光に係る「うすぐらい」意味の用法と、場所・空間に係り單純に「荒れた」意味を表す用法の少なくとも二つの用法が存在すると考えられる。

以上、今回の「荒荒」の調査では、まず杜甫の詩に用例が見られたものの、「野日」という光を修飾する用法であり、「碧海壚」に係る『後集』での例とは意味用法が異なっていると考えられた。そして、『後集』の「荒荒」の類例としては、晩唐の司空図や五代十国期の易靜といった、同時代以降の例のみが確認できたものの、『後集』例とそれら同時代以降の中国例の元となる先行例は確認できなかった。本稿としては、この杜甫例とは異なる單純に「荒れた」意味を表す「荒荒」の用法には、道真以前に今回確認できなかった何らかの典故が存在していたのではないかと考えたい。

#### 四一三、まとめ — 「顆類」「荒荒」の典拠について

『後集』の「顆類」と「荒荒」の例について、中国における典拠の調査を進めてきた。結果としては、二語ともに道真以前では類似する用法の中国例が確認できなかったものの、道真の同時代以降では複数の類例を見出すことができた。この、中国には同時代から後世にのみ類例が確認できる点から、本稿としては、「顆類」「荒荒」は道真以前から中国において口語として存在しており、『後集』例とそれ以降の中国の用例は、その口語を取り入れたものではないか、と考えたい。

道真詩における唐代の口語表現の受容については、静永健氏が以下の様に指摘されている。

菅公の詩歌に見える数々の口語表現は、白居易にその用法を学び、単に当時の〈生きた漢語〉を習得するだけに止まらず、更に軽妙洒脱な使い方にまで高められてもいたのである。(静永(二〇〇三)、傍線筆者)

「顆類」「荒荒」には白居易の用例は確認できなかったため、「口語表現は、白居易にその用法を学び」という特徴は異なるが、静永(二〇〇三)において道真詩中の「口語表現」として指摘されている「呵手」について、宋代の詩詞の用例を示されており、この点は「顆類」「荒荒」も宋代詩詞に用例があるため同様の特徴を持っていると言える。口語は文献として残されないため、用例としての証拠が無いものの、本邦の道真による『後集』の用例と、それと関連し得ない同時代以降の中国例に同じ用法の語彙が存在するという状況から、本稿では「顆

類」と「荒唐」について、唐代の口語を典拠とする語彙なのではないか、と推定したい。

また、松尾（一九九〇）では、『文草』『後集』中の詩における「口語」として検討すべきもの」として、計九九語の表現を挙げられており、その内聾語では「呵呵」と「騰騰」が指摘されている。紙幅の都合上「呵呵」「騰騰」の考察は別稿を期すこととしたいが、「道真の詩中の口語表現は、唐の詩人の作品の一般に比べ、かなり多い」（松尾（一九九〇））とも指摘されており、その他の聾語についても、出典として唐代口語の可能性を考慮して調査を進める必要があると思われる。なお、「類類」「荒唐」については、松尾（一九九〇）では「口語」として検討すべきもの」に含まれていなかった。

道真は、唐代の例が文献に残らない様な口語俗語的な語彙をも正確に撰取し、作品に応用していたと考えられる。こうした語彙は、唐以前の中国例を調査しただけでは類例がほぼ見られないため、ともすれば和習的語彙と判断されてしまいかねない。しかし、後世の中国例も確認することで、実際は中国においても通用する正格な漢語であった事が明らかになる場合があると言える。そのため、本邦漢詩漢文の語彙調査において、中国典拠を確認する際、先行例のみならず、後世の中国例の確認も必要であると考えられる。また、今回唐代の口語に由来すると考えた「類類」「荒唐」は、共に謫居中の作品を集めた『後集』中に用例があるため、道真は配流後も口語漢語、つまり当時の生の中国語に触れる機会があった、もしくは、既に道真自身が母語話者と接せずとも口語漢語を駆使できるほどに中国語に精通していたことが想定される。

## 五、今後の課題

本稿では、仏教語の用例調査において『SAT大蔵経データベース2018』を使用した。これには道真より後世の文献も含まれているため、今後道真が参考にできた仏典についての精査が必要であると考えられる。また、道真作品に影響を及ぼした仏典は具体的に何であったのか、今後『菅家文章』『菅家後集』の他の語彙からも考察を進めてみたい。

また、『菅家文章』『菅家後集』には詩においても仏教語の影響が少なからずあることが分かったため、今後の語彙の典拠調査では『全唐詩』やその他の中国例と併せて、仏典の用例にも注意していきたい。

#### 参考文献

- 平岡武夫（一九六〇）『唐代研究のしおり4 唐代の詩人』京都大学人文科学研究所、昭和三五年
- 金子彦二郎（一九七八）『平安時代文学と白氏文集』道真の文学研究篇第二冊』芸林舎、昭和四三年
- 松尾良樹（一九九〇）『平安朝漢文学と唐代口語』『国文学』解釈と鑑賞』五五卷一〇号、平成二年
- 静永健（二〇〇三）『菅家文章』に見えたる口語表現』『菅原道真論集』勉誠出版、平成一五年
- 谷口孝介（二〇〇六）『菅原道真の詩と学問』塙書房、平成一八年
- 安部清哉 中山大輔（二〇一三）『唐詩詩語「欷枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）』『学習院大学文学部研究年報』五九、平成二四年
- 望廬会（二〇一三）『支遁詩訳注稿（六）』『東洋古典學研究』三五、広島大学東洋古典学研究会、平成二五年
- 中山大輔（二〇一四甲）『中国詩詩語「欷枕」用法変遷論…唐・五代詩篇』『人文』一一、学習院大学人文科学研究所、平成二六年

中山大輔(二〇一四乙)「中国詩詩語「敲枕」(枕をそばだつ)用法変遷論・宋詩篇」『学習院大学国語国文学会誌』  
五七、平成二六年

谷口孝介(二〇一五)「菅家の吉祥悔過」『日本古代の「漢」と「和」』勉誠出版、平成二七年

中山大輔(二〇一五)「中国詩詩語「敲枕」(敲枕・枕をそばだつ)の用法変遷論・唐詞・宋詞篇及びまとめ」『人文』一三、学習院大学人文科学研究所、平成二七年

中山大輔(二〇二二)「菅家文章」『菅家後集』を中心に見た上代・中古前期の漢語・唐語の受容―併せて川口久雄氏校注旧大系本の「適々遇」を「適遇」に訂正す―』『人文』二〇、学習院大学人文科学研究所、令和四年

#### 参考資料

『大漢和辞典』修訂第二版、大修館書店、一九八九年

川口久雄『日本古典文学大系72 菅家文章 菅家後集』岩波書店、一九六六年

川口久雄・若林力『菅家文章菅家後集詩句總索引』明治書院、一九七八年

『漢語大詞典』上海辞書出版社、一九八六年

『佩文韻府』索引本、台湾商務印書館、一九六六年

『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇〇年

『全唐詩檢索系統』<http://cls.lib.ntu.edu.tw/tang/Database/index.html>

『唐宋詞全文資料庫』[http://cls.lib.ntu.edu.tw/CSP/W\\_DB/index.htm](http://cls.lib.ntu.edu.tw/CSP/W_DB/index.htm)

『宋詩』<http://cls.lib.ntu.edu.tw/QSS/home.htm>



『漢籍電子文献資料庫』 <http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>

『中国哲学書電子化計画』 <https://ctext.org/zh>

『SAT大蔵経データベース 2018』 <https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/~大蔵経/master30.php>

文章の会『菅家文章注釈 文章篇第一冊』勉誠出版、二〇一四年

岡村繁『新釈漢文大系 106 白氏文集 十』明治書院、二〇一四年

中村元『広説仏教語大辞典』東京書籍、二〇〇一年

【付記】 本論の構成・論述については、草稿の段階から安部清哉先生（学習院大学教授）にご教導とご鞭撻を賜りました。末尾ながらこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

